2015年
爽春号
第 186 号

飛鳥 かわら版
ASUKA KAWARABAN

発行所
飛鳥出版室
発行人　永野　正将
〒780-0945 高知市本宮町65-6
電話　088-850-0588
e-mail:info@asuka-net.jp
http://www.asuka-net.jp

於　鏡川河畔

花より団子の花見宴。
お酒好き、宴会好きの高知県民ならなおのこと。
四季の移り変わりは宴を開く口実に過ぎないのかもしれないけれど、集える仲間がいる喜びを再確認できる瞬間ではないでしょうか。
変わらず巡ってくる光景は平穏の証。いつまでもあり続けますように。

僕と高知 新しい希望を探して ……浅田　元　2
おのころじま奮染記　4 ……田島征彦　4
キルギスタンからコンニチハ ㊷ ……氏原名美　5
あすへの歩跡　5 ……大澤重人　6
文章力レベルアップ講座 (16) ……水木和香　7
催し物案内板 …… 8
出版物紹介 …… 9
わが家の太郎 ㊸ ……永野雅子　10

「いろいろかいろ」はお休みします

終戦70年特集　原稿募集中
詳しくは７ページをご覧ください

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

僕と高知

新しい希望を探して

浅田　元

今年の春で、「社会人」として高知に住み始めて、ちょうど一年になった。

僕の高知での仕事は一言で言うと、大人と若者の出会いの場づくりである。具体的なやり方は、セミナーを開いたり、インターンシップをコーディネートしたりと、さまざまである。仕事場は、市内だけではない。時には、高知の郡部や県外にも出て行って仕事をすることもある。

「場づくり？」「それって仕事なの？」――社会人になってからの僕の人生の頻出単語だ。

結論から言うと、仕事になっているとも言えるし、なっていないとも言える。その価値を認めてくれるお客様もいればそうでないところもある。まだまだ道なかばである。

僕はいわゆるＩターン者で、二十六年の人生のうち、高校を卒業するまでは、ずっと大阪に住んでいた。そのような経緯もあり、相当な高知好き（あるいは田舎好き）と思われることが多い。もちろん、大学時代という人生の中で最も素晴らしい時間を過ごした高知とい

う土地が好きだし、人が多い都会より自然が豊富な田舎の方が好きなことは否定しない。でも、それが最も大きい理由かと言うと、そうではない。僕が高知に戻ってきた理由で、最も適切な表現は「納得がいった」ということだったように思う。

大学三年で進路を真剣に考える時期になっても、決めることが出来ず、学校にも行かず、家で一人悩んだ。留年し、二回目の四年生を迎えても、まだ決めきれず、進路未定のまま卒業し大阪の実家に帰った。普通の大卒なら、一般企業か、役所に入るか、教員になるか――実際、それが周りの友人の主な進路だった。でも、僕は最初から、ある程度高をくくり、「まあ人生こんなものだろう」という風に決め込んでしまい、生きていくことに納得がいかなかった。僕は、遠回りの人生で損をしても、納得のいくまで考え込むことを選ぶタイプだったようだ。

卒業してからは、アルバイト漬けの日々だったが、暇を見つけては旅をした。そんな中で、日本の自然の風景に感動して、この荘厳な風景を守るには、地域がもっと強くならなくてはいけないと思った。そんなことが出来る仕事がやれたなら、人生に納得が出来ると思い、門を叩いたＮＰＯは、積極的に高知の若者を応援し、高知を盛り上げる志を持っていた。

そんなわけあって、今僕は、いわゆる「地域おこし」を仕事にしている。都会でずっと暮らしてきた自分が、コンビニもない田舎に足を運ぶ。就職活動もしなかった自分が、学生の進路相談に乗ったりもする。妙な話である。安定した立場とも言えないし、特殊な仕事故の苦悩もある。ただ、まぁ、人生に納得はしている。

今、日本は経済的には下り坂にある。少子高齢化で、働き手が減ることは目に見えているし、国としてのピークはとっくに終わっているからだ。一昔前――親の世代なら、高度経済成長の真っただ中で、「経済的発展＝幸福度の向上」というわかりやすい希望を、世代性別問わず共通のものとして持てたのだろう。

「これから世界はもっと良くなる」そんな共同幻想が、人々の日々の歩みの一歩一歩を支えてくれた時代は終わり、ニュースや新聞では問題ばかりが目に留まる。そんな疲弊しきった雰囲気の中で、今の同世代の若者の中には、自分達の未来を何とか明るくしていこうとする新しい動きが、顕著に表れていると思う。古い希望に変わる、新しい希望を探しているのだ。

一九六〇年代の学生闘争がそうだったように、時代が移り変わろうとする際の、時代の発熱ともいうべきものに、今の日本の若者は中てられているようにも感じられる。

あえて不便な田舎に移り住む若者も、不安定なＮＰＯで働く若者も、やりたい事がわからず引きこもる若者も皆、先行きの暗い――少なくとも僕の目にはそう映る世界に、なんとか自分なりのやり方で、新しい希望を見出そうとしているのだと僕は思う。

あさだ・げん
大阪府出身。高知大学人文学部卒。
ＮＰＯ法人「人と地域の研究所」事務局。

おのころじま染織記

ふんせんき

田島征彦

４．だいこんの首

京都の西北、口丹波（くちたんば）の山の中から、おのころじま（淡路島）へ引っ越してきた。

この家に住んでいた小説家の灰谷健次郎さんに農業を教えたのはぼくだが、畑は十年以上もつくられていない。荒れはてた畑に、灰谷さんの親戚のWさんが、牛の糞を運んできてくれた。畑の側に積み上げられた牛の肥料を、少しずつ土の中へ入れてゆくが、長い間放っておかれた土には、野菜が育たない。何十回も除草剤が使われたにちがいない。葉野菜は針金のように堅く水気が乏しい。根菜も土に栄養がないから、根毛を張ろうとはしなかった。

健気に、醜い姿で生えている育ちの悪い野菜も、収穫して食べた。

英子が台所で「こんなモンのために調味料がもったいないワ」とイマイマシゲに言うのをかまわず、ぼくはマズイ野菜たっぷりの朝食をかみしめるのだった。

二年、三年と世話をしていると、少しずつ、チンゲンサイ、ヒユナ、ツユムラサキなどの中国野菜が力強く育ち始めた。カボチャが勢い良くビワの樹へよじ登り、立派な実をぶら下げたり、甘いトマトが採れるのに五年かかった。そして、口丹波へ残してきた、手塩にかけた畑のことをやっと忘れることができた。

春先になると、島の畑のあちこちに首のない大根が立ち並ぶのだ。おのころじまに来て、初めて、白い亡霊のように奇妙な行列が畑に立っている姿を見た時は、ギョッとした。それが、首の上の葉を無惨に、そぎ落とされた憐れな大根であることに気付いた時は、正直腹立たしく思った。そのまま放っておけば、茎が立ち、花が咲いて、大根にはスがはいり、スジだらけで食べられなくなってしまう。しかし、畑にはキヌサヤや豌豆豆、それに空豆などが競って花を咲かせて、やがておいしいビールの友が実る。

季節のものを、楽しく食べてやるのが、土をいつくしむ人間のやることだ。野菜も、どんな動物だって、もちろん人間だって身体にも心にも花を咲かせる刻が来る。

おのころじまでくらして十年が過ぎた。灰谷さんは小説家だから、座ぶとんに座って文章をかくための場所があればよい。しかし、大きな作品ばかり制作するものにとって、広い仕事場が必要なのだ。倉庫の壁に穴をあけて、窓を作って、アトリエにしていたが、空気が澱んで、変な咳になやまされるようになった。新しくアトリエを建てることになって、手塩にかけた畑を半分つぶした。その代わりに隣のＩさんの畑を借りることになった。畑の広さは四倍に増えた。野菜が四倍も収穫できる。三人の子どもたちの家族へ送ってやれる。

この冬も、たくさんの蕉や立派な大根が畑に残っている。春を迎えて、茎が立ち、こんなに多くの根野菜が食べられなくなるのだ。そう思うとぼくは、勇気をふりしぼって、愛しの大根たちの葉を首のところから落としていったのだった。

たじま・ゆきひこ（染色家・絵本作家）
大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染色図案科専攻科修了。一九七八年『じごくのそうべえ』で第一回絵本にっぽん賞。最新作『ふしぎなともだち』で第二十回日本絵本大賞。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

キルギスタンからコンニチハ ⑥②

安全マップを広げてみたら

氏原名美

うじはら・なみ
高岡郡越知町生まれ。北大でロシア語を学ぶ。2001年からキルギス在。国立ビシケク人文大学日本語日本文学科学科長。

『世界の安全度統計』によれば、日本は世界で一番「安全な国」だ。『エコノミスト』の調査に基づく昨年の『世界平和度指数』でも日本は一六二カ国中八番目に「平和な国」である。最も「危険な国」はシリアだ。チュニジアはほぼ真ん中で安全でも危険でもない辺りにあるが、次の統計では相当順位を下げるだろう。キルギスは一二五位。だが、一五二位のロシアよりはましだ。ちなみに、アメリカは一〇一位で、トルクメニスタン、カザフスタン、ウズベキスタンと同レベルだ。

いずれの統計からしても日本は世界で最も治安がよく、テロや戦争の脅威も少ない安心して住める国のようだ。そんな国にとってキルギスはかなり「危険な国」だ。政府が国民に「十分注意」の渡航情報を出すのもうなずける。外務省のホームページを見ると、※CISのほとんどが黄色表示の「十分注意」地域だ。真っ赤に塗られたイランやアフガニスタンは危険度が一番高い「退避勧告」で、ウクライナ東部とクリミア半島は次のレベルの「渡航延期」、危険度三番目の「渡航の是非検討」にはタジキスタンとキルギス南部が当てはまる。

しかし、キルギスに住むものの実感では、この十年で治安はずいぶん落ち着いてきている。国の南北で住民意識や文化背景が異なり、隣国との国境問題に密輸組織が絡み、大国の思惑に情勢が左右されやすく、政変や国際紛争に巻き込まれる恐れがないとはいえないが、街行く人の表情は穏やかで、見知らぬ人への警戒心が弱まったのかバス停での世間話も和やかだ。毎年恒例の日本語弁論大会にしても、スピーチのテーマが数年前までは政治的腐敗、経済的困難、民族のアイデンティティに関する問題提起といった内容が多かったが、最近は幸せ論や趣味談義に日々の暮らしのひとこまなど明るい話題ばかりだ。

今回も「日本人は見た目に十歳プラスすれば実年齢」と先生が教えてくれた法則を一目惚れした若い日本人女性に当てはめたら、母親と同世代ということになり右往左往した話だったり、「羊の丸ごと料理は魚の尾頭付きと同じ。おいしく召し上がれ！」と異文化体験の勧めだったりの、どれも愉快で楽しいスピーチだった。

今年初めての交換留学生を日本から迎える準備をしていたころ、イスラミック・ステイトによる日本人殺害事件が起きた。まさか「中央アジア即ちイスラム、イスラム即ちテロリズム」と考えたわけではないだろうが、協定大学は「情勢を確認するまで学生派遣を延期する」と連絡してきた。学生の「安全確保」が留学延期の理由だ。確かに、苦学生が減り、若者の多くが青春を満喫しているように見える一方、宗教色の極めて薄かったキルギスで何かが変わってきているのも確かだ。お祈りの時間になると授業を抜けてモスクに向かう男子や、まだまだ少数派とはいえヒジャブで頭を覆い丈の長い服ですっぽり体を隠した女子学生が珍しい存在ではなくなっている。単なるブームか本物の信仰によるものなのか、外からは見えない。

しかし日本の大学は、凶悪犯罪発生率が日本の何十倍というアメリカには毎年学生を送り込んでいる。キルギスは日本にとって遥かなる国、心理的に遠い国なのだ。

※CIS（シーアイエス）＝独立国家共同体
旧ソ連を構成していた十五ヶ国のうち、バルト三国およびグルジアとウクライナを除く十ヶ国からなる

あすへの歩跡 5

大澤重人

血も涙もある法服の人

元高松、高知地裁所長　溝淵　勝さん(73)

みぞぶち・まさる
高松市生まれ。明治大法学部卒業。2001年に高知地裁所長、05年に高松地裁所長。07年に定年退官し、2年間は津野町で田舎暮らしをした。高知市福井町在住。趣味は釣り、囲碁五段。
※ 毎日新聞3月18日付朝刊「ひと」でも紹介

裁判官といえば「血も涙もない優等生」。裁判所といえば「堅苦しい職場」。そんな先入観がありませんか。

一九七〇年に任官し、高知地裁に赴任した。保釈請求の記録が自分の机に三冊も置いてある。通りがかりの上司が「却下にしたら」と声をかける。新米判事補といえども、見過ごすことができなかった。渋る書記官を立ち合わせ、上司に抗議に行った。「裁判干渉です」

司法修習生のとき、憲法擁護派の研究団体「青年法律家協会」（青法協）への加入を誘われたが、優秀な同期が軒並み入るのを見て断った。後に青法協が最高裁に問題視されるようになると、一転して入会し、憲法週間の昼食会で最高裁判事に「どこがいかんのですか」。

当時を楽しげに振り返り、「裁判所は懐が深いですよ」。

司法試験を目指したのは、大学卒業前に「成績が悪くて」就職が決まらなかったから。一番入りやすい受験団体に入ったら、過去の合格者はゼロだった。それでも四年後に合格した。定年退官までの三七年間、主に出身地の高松と、肌合いの合った高知で勤務。民事、刑事、家事、少年事件を担当し、四国トンネルじん肺訴訟や上海列車事故訴訟などを指揮した。

「現場を見ないとわからない」が持論だ。容疑者や被告を、拘置所ではなく警察署の留置場に収容する代用監獄が問題になると、代用監獄と刑務所を視察した。八〇年、窪川（現・四万十）町に原発誘致計画が浮上すると、高知地裁の旅行会で伊方原発（愛媛県伊方町）を見学した。配管のぜい弱さを直感し、退官後に脱原発の市民活動を始める原点となった。

多種多様な事件を担当した。専門学校生二人が乗った車が暴走して電信柱に衝突し、助手席の一人が植物状態になった。運転者の父親が証人に立った。「罪を軽くしてと言いに来たのではありません。自分が責任を持つべきだ、けじめを付けろと言いに来ました」

被害者の母親も証言した。加害者を非難するのだと思っていたら――。「車が好きな子で、暴走行為をしていて楽しかったのでしょう。加害者の親の責任を追及するつもりはありません。被告には息子の分まで生きてほしい」。その後、加害者の父親から被害弁償があった。損得勘定がさらけ出されるのが法廷だが、「世の中にはこんな人たちがいるのです。泣きましたね」。

裁判員制度導入時、一般の人にこう説明した。「裁判の九五％は事実認定。法律を適用するのはその後です。事実認定は人が生きている限り誰でもしていること」。逆に言うと、裁判官の人間性が裁判の九五％には現れるわけだ。

取材が一段落した。同行した飛鳥の女性編集者が一人暮らしと知ると、自宅の畑に入り、無農薬で育てた大根などを引き抜いた。「人にあげるのが好きで」

法服の下は、生身の人間だった。

おおざわ・しげと
毎日新聞大阪本社工程センター室長。高知支局に支局長、次長として計五年半勤務した。著書に『心に咲いた花―土佐からの手紙』。

一歩先へ！文章力レベルアップ講座 (16)

起承転結
――全体の構成を考える

みずき・わか
高知市在住。フリーライター、生涯学習コーディネーター。文章教室や漫画の原作教室など高知市を中心に開催している。

水木和香

文章の構成を考える時に便利なのが、「起」「承」「転」「結」です。もともとは漢詩の構成要素を表したもので、「起承転結」という四文字熟語はありません。ですから単純に四分割するのではなく、長短はあってもポイントごとに各要素を満たしているかが大切なのです。

・起（き）――話の導入部分です。読み手と書き手の共通部分を作り、これから書かれる内容への期待を持たせます。主人公が誰か、背景がどうなっているかは、ここで書き切っておきます。

・承（しょう）――前の部分を受けて主人公を動かし、話を膨らませていきます。副主人公や主な登場人物は出し切りましょう。まだ切り札を隠し持っているようでは、話が盛り上りません。

・転（てん）――話が順調に進んでくると、そろそろ着地点が見えてきます。同時に読み手の関心も薄れそうです。そこで切り口をがらりと変えて、読み手に新鮮な驚きを与え、再び興味を持たせます。最もセンスが要求されるところ、全体のクライマックス（山場）です。

・結（けつ）――印象的な言葉とシーンで、言いたいことを鮮明に伝えます。ここまで来て、まだもたつくようなら、全体の構成を見直さなくてはなりません。

少し古い作品では情景描写をたっぷり行ってから主人公が登場したり、また前衛的な作品では主人公が誰かを明かさずに話を進めるものもあります。しかし今は、まず主人公をしっかりと描写し、読み手が主人公に感情移入した上で話を進めていくという方法がスタンダードです。

このスタイルは、初っ端に主人公が目に飛び込んできて、最後までその主人公がキャラクターを保っている、漫画を読み慣れた世代が増えるにつれて定着して来ました。紋切り型で面白くないと思われるかもしれませんが、基本を押さえておくことが大前提です。

構成の目的は、あくまでも内容を読み手にスムーズに理解してもらえるようにすること。冷静になって、第三者の目で文章を吟味すると、不要な拘りが消えて、滞りが解決するかもしれません。

あなたのご寄稿をお待ちしています

二〇一五年夏、終戦から七十年を迎えます。大きな節目を前に私たちに何ができるでしょうか。悲惨な歴史を繰り返さないために、過去の真実を語り継がなければなりません。

あなたの「戦争の記憶」をお寄せください。歴史の大綱に残されていない、戦中の日々の小さな出来事で構いません。

〒780-0945
高知市本宮町65-6　飛鳥出版室 宛
電話　088・850・0588
FAX　088・850・0599
メール　info@asuka-net.jp
（件名に「かわら版係」と明記してください）

※字数制限はありません。掲載したい写真等がありましたら併せてお送りください。（掲載後返却いたします）

募集締切
7月15日（水）（郵送の場合は消印有効）

お寄せいただいた文章は、二〇一五年夏発行（187号）に掲載予定です。

催し物案内板〈4月～7月〉

企画展　安田町・高知県立坂本龍馬記念館　連携企画 第13弾
現代龍馬学会第2・3回パネル展より「龍馬のように！」
と　き　開催中～5月12日(火)　※水曜休館
9:00～17:00
ところ　安田まちなみ交流館・和（なごみ）
入館料　無料

刺繍をまなぶ
と　き　開催中～5月10日(日)
※毎週月曜休館（但し、5月4日は開館）、5月7日（木）
9:00～17:00（入館は16:30まで）
ところ　香美市立美術館
入場料　一般510（250）円・（　）内20名以上団体料金
長寿手帳提示250円、身体障害者手帳提示無料、高校生以下無料

維新を生き延びた男たち「志士たちの明治」展
と　き　開催中～6月26日(金)
9:00～17:00（※会期中休館日なし）
ところ　高知県立坂本龍馬記念館
入館料　大人（18歳以上）500円（20名以上団体 400 円）
高校生以下、高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被曝者健康手帳所持者とその介護者1名は無料

第34回 高知学芸中学高等学校吹奏楽部定期演奏会
と　き　4月25日(土)
開場17:15／開演18:00
ところ　高知県民文化ホール（オレンジ）
入場料　500円

企画展 大坂夏の陣400年
長宗我部遺臣それぞれの選択
と　き　4月29日(水)～6月21日(日)
9:00～17:00（入館は16:30まで※会期中無休）
ところ　高知県立歴史民俗資料館
観覧料　大人（18歳以上）510円（20名以上団体 410 円）
高校生以下、高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被曝者健康手帳所持者とその介護者1名は無料
※5月3日（日）「歴民の日」は観覧無料！

第26回 高知西高等学校吹奏楽部定期演奏会
「SHADOWS ABLAZE」
と　き　5月3日(日・祝)
開場17:30／開演18:00
ところ　高知県民文化ホール（オレンジ）
入場料　一般前売 1,000円　高校生以下 500円

イヴリー・ギトリス ヴァイオリン・リサイタル
と　き　5月10日(日)
開場14:30／開演15:00
ところ　高知市文化プラザかるぽーと（大ホール）
入場料　一般 5,000円（当日 5,500円）
（全席自由）　高校生以下 3,000円（当日 3,500円）

第13回 高知一先会かな書展
と　き　5月15日(金)～5月20日(水)
10:00～18:00（最終日は17:00まで）
ところ　高新画廊

鏡野吹奏楽団 第38回 定期演奏会
と　き　5月30日(土)
開場17:45／開演18:30
ところ　高知県民文化ホール（オレンジ）
入場料　一般 1,000円（当日 1,200円）
学生（小中高大）500円（当日 700円）

三曲演奏会
と　き　5月31日(日)
開場13:00／開演13:30
ところ　高知県立美術館ホール
入場料　2,000円（中学生以下無料）

混声合唱団Pange　第12回定期演奏会
と　き　6月13日(土)
開場18:00／開演18:30
ところ　高知県立美術館ホール
入場料　一般前売 1,000円（当日 1,300円）　大学生以下 500円（当日 700円）

初夏のいけばな展
と　き　6月20日(土)～6月21日(日)
10:00～18:00（21日は17:00まで）
ところ　高知市文化プラザ かるぽーと7階
第１・第２展示場
入場料　前売券 400円、当日券 500円

第２回 書と彫刻による合同（コラボ）展
第８回蒼玄会書展・アトリエ「造」彫刻展
と　き　6月23日(火)～6月28日(日)
9:30～18:00（最終日は17:00まで）
ところ　高知市文化プラザかるぽーと 第1展示場

第３回 白光社書展
と　き　6月23日(火)～6月28日(日)
10:00～18:00（最終日は17:00まで）
ところ　高知市文化プラザかるぽーと 第3展示場

第38回 全日本おかあさんコーラス
と　き　四国支部高知大会 7月5日(日)
開場12:30／開演13:00
ところ　高知市文化プラザかるぽーと（大ホール）
入場料　500円

第30回 高知県独立書展
（第60回 墨線美術協会展）
と　き　7月21日(火)～7月26日(土)
ところ　高知市文化プラザかるぽーと

催し物案内板　番外編

第30回記念 草心会書展

3月13日㈮～18日㈬　於　高新画廊

「書展」と聞くと、難しく敷居の高いイメージがあったのですが、会場は明るく開放的、足元の生け花や趣向を凝らした装具が色を添え、柔らかな雰囲気の親しみやすい書道展でした。

温かいお茶をいただきながら、ほっと一息つくことができました。

安田まちなみ交流館・和（なごみ）

現代龍馬学会第2・3回パネル展より「龍馬のように！」開催中（5月12日㈫まで）

周辺の町並みは国の登録有形文化財に指定され、町全体にゆったりとした「やすだじかん」が流れています。安田まちなみ交流館・和は大正二年に建築された木造洋館造りの旧市川医院、昭和初期に建築された旧柏原邸をそのまま活用しており、当時を偲ばせる内装も残されています。

安田の町に流れる空気を吸い込んだ落ち着きのある交流施設です。

雑書き

▼小学校入学をきっかけにバドミントンを始めた娘。何だかんだ言いながら一年間頑張って、今度試合に出てみようか、という事になった。祖母に話すと見に行きたいと言ってくれたのだけれど、練習に付き合っているパパ曰く「多分大泣きするで…」とのこと。実力も度胸もまだまだの娘。がんばれ！　（安）

▼柑橘大国高知に文旦の季節がきました。県外では、文旦といえばめったに見かけない珍しい果物でしたが、高知ではゴミ袋いっぱいに入って五〇〇円、道端で投げ売りという有様。先日も「ちょっとしかないけど…」と頂いた袋には六玉も入っていました。いやいや…六玉は「ちょっと」ではないと思います…。

▼終戦七十年特集、細々と告知しているにもかかわらず、様々な方が原稿をお寄せくださっています。思いを大切に受けとめて、次号でお届けします。　（上）

出版物紹介

決定版 中西繁絵画講座
初心者でもいい絵が描ける

過去に二冊の油絵講座本を出版した著者が「決定版」と位置づける講座本。「いい絵とは何か」「どうすればいい絵が描けるか」ということに重点をおいて著者の持論が展開されている。

著者による制作過程や作品、美術研究会の作品例なども掲載。

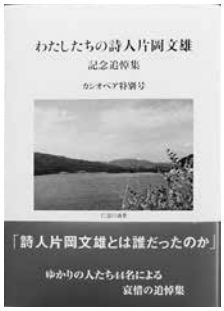
※ご希望の方は「中西繁アートギャラリー」までお問い合わせください
http://www.7b.biglobe.ne.jp/~nakanishi-art

著者・中西 繁／発行・中西 繁アトリエ／205×185／102頁／並製本／頒価・2,500円（税込）

わたしたちの詩人片岡文雄
記念追悼集 カシオペア特別号

「詩人片岡文雄とは誰だったのか――」

二〇一四年に逝去された高知県伊野（現・いの）町出身の詩人。一時は高知新聞「詩壇」の選者を務め、県内外問わず高い評価を受けている。作者の心情を深く読みとり、詩を楽しむ人に分け隔てなく慈愛の手をさしのべた氏の姿を慕う人は多く、ゆかりの人々四十四名による詩編や追悼文が掲載されている。



編集・「わたしたちの詩人片岡文雄」刊行委員会／A5判／192頁／並製本／頒価・1,620円（税込）

依岡家の歴史

著者・依岡俊夫、依岡の人達17人／編集・依岡 稔、依岡義浩、依岡寛幸／発行・依岡稔、依岡寛幸／A5判／248頁／上製本・貼函／私家版

かつて、幡多郡大月町才角には、依岡姓の家が多数あったが、今や二軒を残すだけとなっている。故郷を離れ、未来を生きる人たちに依岡一族のルーツを伝えたいと願い、編集された。

第一部は依岡俊夫氏が、長い年月をかけて史書や郷土史、墓石などから調査研究を重ねた資料集。第二部は現在に生きる依岡一族の人たち十七名が綴った思い出など。

可愛い子には留学させろ
～わたしの留学体験記～

著者・森 多栄子／B6判／100頁／並製本／頒価・500円（税込）

時は一九八〇年代後半。著者が高校二年生の時、日本の学校に窮屈さを感じアメリカへ飛びたった。一年間のつもりがその土地の気風に馴染み、大学時代までもアメリカで過ごした。数年間の留学生活の中で経験した、夢や憧れだけでは語りきれない波瀾万丈な日々を、時を経て振り返り、飾ることなく綴った青春時代自分史。

飛島蔵書

値段のないものはお売りできません。貸出はいたします。

動く印刷！ 話題のARで情報を飛躍的に拡充！

「今、話題のＡＲ」って何？

ＡＲとは「Augmented Reality」の略で、「拡張現実」とも言われます。私たちが見ている現実の環境にデジタルの情報を付け加え、目の前にある現実以上の情報を提示する技術の総称です。

印刷物にプラスすることで、スマートフォンなどの携帯端末を通して映像を楽しむことができます。印刷物に新たな可能性！「動く印刷」をぜひご体感ください！！

★右の画像からもAR動画をお楽しみいただけます

「動く印刷」続々拡大中！！（順不同）

大豊町観光パンフレット「感動体験おいでよおおとよ」、『ほっとこうち』、高知県観光チラシ「トサコレ！」、高知県立文学館年間イベントガイド、高知県立坂本龍馬記念館機関誌「飛騰」　ほか

たのしみかた

1 無料アプリ「COCOAR2」をお手持ちのスマホやタブレットにダウンロードします。（iPhone、iPad、Android対応）

左のQRコード、あるいはアプリストアから「COCOAR2」と検索してダウンロードページにアクセスしてください。

2 アプリのアイコンをタッチし、起動させます。読み取り画面が表示されますのでお待ちください。

COCOAR2

3 対象となるマーカー（画像など）にかざし読みとります。

オレンジ色に表示される枠を目安に印刷物との距離を調整してください。ピントが合いにくい場合はアプリを起動しなおしてください。

オレンジの枠

※必ず「COCOAR2」をダウンロードしてください。※端末の環境により、イメージが認識されるまでに時間がかかったり、正常に動作しない場合があります。※詳細は弊社ホームページ（http://www.asuka-net.jp）よりご確認下さい。

今号は「わが家の太郎」の画像が動くよ！

太郎のお散歩を楽しもう！

12ページへGO！

印刷屋さんの「すったもんだ」

「春が来た　春が来た　どこに来た　山に来た　里に来た　鼻に来た」ということで、今年もやってまいりました花粉の季節！　私の周りでも「今年はキツイね～」という方と「全く感じない」という両極端の意見があります。中には「治った」という方もいます！　花粉症が治るか否かは分かりませんが、少なくとも全く症状が出なくなったという事で、皆さん一様に「体質改善」というキーワードがあり、特定のヨーグルトを毎日食べている方や、健康のためにダイエットを始めたという話もありました。

私自身はまだまだ薬なしでは仕事もままならぬ状態です。お客様訪問時は出来る限りマスクだけは外すように心がけております。

この季節、早く過ぎてほしいと願うばかりです。

他愛もないお話でした、、、、敬具

（永野正将）

わが家の太郎 ㉝

独り身

永野　雅子

二月のある寒い日、夫の友人の祝賀会に参加した帰り、二次会にお誘いを受けて、親しくしている奥様もご一緒の場だからとお邪魔することにした。

夫がお世話になった方達と久しぶりにお会いして、楽しい時間を過ごし、三次会までお付き合いして、気がついたら深夜近い時刻になっていた。

こんなに遅くなるつもりではなかったので、途中、太郎のことが少し気にはなったけれど、

「ま、いいか。滅多にないことだし、文句を言われるわけじゃなし、独り身の気楽さよ」と、呑気にかまえた。

家に帰り着いて太郎はと見ると、庭の木の根元で蹲っている。いつもなら、縁側の敷物の上ですやすやと眠っている時刻。

「太郎、ただいま。遅くなってごめんね」

声をかけても動かない。深夜の事だし、ご近所の手前大きな声も出せない。

ひたすら低姿勢の小声で

「太郎ちゃん、入っておいで」を繰り返すが、頑として無視。

外は凍りつくような寒さ。このままにしておくわけにはと、庭に出て引っ張り入れようとすると、「ウーッ！」威嚇するような声を出して足を踏ん張る。

「ごめん、ごめん」と言っている内に、なんだか夫に言っているような気がしてきた。

私が居ると、太郎も意地から入って来られないだろうと、二階に上がる。

翌朝、見れば昨夜の場所で蹲ったまま寝ているではないか。犬小屋もあるのに、この寒空のなか、そこまでして男の沽券を貫く姿に脱帽。

太郎、よくわかりました。私は独り身ではなかったのです。

ながの・まさこ／飛鳥常務取締役

動く！印刷

画像をスキャンして
AR動画を楽しもう！

（詳しくは11ページをご覧ください）